

アバール語の相互代名詞 *tsotsa*-の分布*

山田 久 就

1. はじめに

照応詞 (anaphor) (再帰代名詞、相互代名詞) の分布は、類型論的統語研究及び理論的統語研究の中心的なトピックの一つである¹。世界の諸言語の照応詞は、ある共通性を保ちながらも、かなり違った分布を示す。本稿では、北東コーカサス諸語 (ダゲスタン諸語) の一言語であるアバール語の相互代名詞 *tsotsa*-の分布を考察の対象にする。

アバール語の格配列は絶対格・能格型である。本稿では、Dixon(1979, 1994) の用語 S、A、O を用いるが²、アバール語のような絶対格・能格型の格配列を持つ言語では、S と O が絶対格で現われ、A が能格で現われる。一方、日本語のような主格・対格型の格配列を持つ言語では、S と A が主格で現われ、O が対格で現われる。S、A、O は、節の主要なアクタントであり、S、

* 本稿は日本語学会第 116 回大会で「アバール語の相互代名詞 *tsotsa*-について」として発表した内容に加筆と修正を施したものである。鈴木英一先生、加賀信広先生、佐々木冠氏、西田光一氏に草稿に対して貴重なご助言をいただいた。ここにお礼を申し上げたい。アバール語は、北東コーカサス諸語 (ダゲスタン諸語) に属し、主にロシア連邦ダゲスタン共和国で話されている。アバール語の文語で用いられている文字はキリル文字であるが、本稿ではラテン文字へ次のような転写を行って、アバール語を表記している。a:a, б:b, в:v, г:g, гъ:γ, гь:h, гI:ʃ, д:d, е:e, ж:zh, з:z, и:i, й:j, к:k, къ:kx', къ:tʃ', kl:k', л:l, лъ:l, м:m, н:n, о:o, п:p, р:r, с:s, т:t, тI:t', у:u, ф:f, х:x, хъ:kx, хь:ç, xl:h, ц:ts, ч:ch, ш:sh, ш:shsh, э:e, ю:ju, я:ja。本発表のデータは 1996 年 8 月から 1998 年 2 月までの間と 1998 年 8 月にロシア連邦ダゲスタン共和国で行った調査による。Samedov, Dzhalil S. 氏、Xangereev, Magomedbek D. 氏、Isalmagomedov, Isalmagomed M. 氏を中心に多くの方にアバール語のインフォーマントになっていただいた。ここで、感謝の意を申し上げたい。本稿で用いる省略記号は次の通りである。ABL:奪格、ABS:絶対格、ACC:対格、Adj:形容詞、AdjPt:形容詞的分詞、ALL:向格、DAT:与格、ERG:能格、GEN:属格、LOC:位格、NOM:主格、PL:複数、PRS:現在、PST:過去。アバール語の位格、向格、奪格は 5 系列の構成要素からなる。系列 I、II、III、IV、V の基本的な意味は、それぞれ、「~の上」、「~の辺り、~の所」、「~ (連続的な媒体など)の中」、「~の下」、「~ (入れ物など)の中」である。

¹ 「照応詞」という用語には、再帰代名詞と相互代名詞だけを含む用いられ方と、文脈指示の人称代名詞、指示代名詞をも含む用いられ方があるが、本稿では、再帰代名詞と相互代名詞の総称として「照応詞」という用語を用いる。

² Comrie (1978) などは、O の代わりに P を用い、S、A、P という表記法を用いている。

A、O 以外のアクタントは二次的なアクタントと考えられる³。S は自動詞の唯一の主要なアクタントである。A と O は他動詞の二つの主要なアクタントである。典型的な他動詞節では、動作主 (Agent) が A として、被動者 (Patient) が O として現われる。S、A、O と格配列の関係を簡単に図式化すると次のようになる。

- (1) 絶対格・能格型： 能格 絶対格
- | / \
- A S O
- \ /
- 主格・対格型： 主格 対格

アバール語の格配列を例示する。(2) は自動詞文で、S の Musa が絶対格で現われている。(3) は他動詞文で、A の Rasul が能格で、O の Musa が絶対格で現われている。

- (2) Musa haniwe wach'ana.
Musa・ABS ここに 来る・PST
「Musa がここに来た。」
- (3) Rasulitsa Musa haniwe wachana.
Rasul・ERG Musa・ABS ここに 連れて来る・PST
「Rasul が Musa をここに連れて来た。」

本稿には、二つの目的がある。第一の目的は、アバール語の相互代名詞 *tsotsa*-の分布を記述することである。アバール語の研究において、私の知る限り、相互代名詞 *tsotsa*-に関する研究はない⁴。第二の目的は、言語類型論及び統語理論の発展に対してアバール語の相互代名詞 *tsotsa*-の分布が持つ意義を明らかにすることである。アバール語の相互代名詞 *tsotsa*-の分布は、類型論的統語研究において広く関心が持たれている統語的能格性の問題に新しい発展を与えられると思われる。Dixon (1994) や Manning (1996) は、照応詞

³ 本稿では、項 (argument) と付加語 (adjunct) の総称としてアクタント (actant) という用語を用いる。

⁴ アバール語の全体像については Bokarev (1949)、Madieva (1980) を参照していただきたい。また、アバール語の研究の歴史については Ataev (1997) を参照していただきたい。

の分布は言語普遍的に統語的対格性を示すと考えているが、それに反して、アバル語の相互代名詞 *tsotsa*-の分布は、統語的能格性を示すことを明らかにしたい。また、本稿では、アバル語の相互代名詞 *tsotsa*-の分布を文法関係と意味役割に基づく制約を用いて理論的に一般化することを試みる。

本稿の構成は次の通りである。2節では、統語的対格性と統語的能格性について簡単に説明する。3節では、意味役割と文法関係という範疇について説明する。そして、4節で、アバル語の相互代名詞 *tsotsa*-の分布を考察する。

2. 統語的対格性と統語的能格性

ある統語現象で S と A が O 及び二次的アクタントに対して優位性を持っている時、その統語現象は統語的対格性を示すと言われ、S と O が A 及び二次的アクタントに対して優位性を持っている時、その統語現象は統語的能格性を示すと言われる。統語的対格性を示す統語現象はいろいろな言語で非常にたくさん報告されているが、統語的能格性を示す統語現象はあまり報告されていない。どの言語のどのような統語現象が統語的能格性を示すのかということは言語類型論の主要なトピックの一つである。

統語的対格性及び統語的能格性を示す統語現象を、ロシア語と Inuit 語の分詞関係節を用いて、例示する。ロシア語で分詞を用いて関係節を作る場合、S (主格) と A (主格) は関係節化することができるが、O (対格) 及び二次的アクタントは関係節化することができない。(4a) では S (主格) が関係節化されていて、(4b) では A (主格) が関係節化されている。(4a) と (4b) は適格である。それに対し、(4c) は、O (対格) が関係節化されていて、不適格である。

- (4) a. [[e]₁ igravshij] mal'chik₁
 遊ぶ・AdjPt,PST 男の子
 「遊んでいた男の子」
- b. [[e]₁ chitajushchij knigu] student₁
 読む・AdjPt,PRS 本・ACC 学生
 「本を読んでいる学生」

- c. *[Tanja [e]₁ chitajushchaja] kniga₁
 Tanja・NOM 読む・AdjPt,PRS 本
 「Tanjaが読んでいる本」

一方、Inuit語で分詞を用いて関係節を作る場合、S（絶対格）とO（絶対格）は関係節化することができるが、A（能格）及び二次的アクタントは関係節化することができない。(5a)ではS（絶対格）が関係節化されていて、(5b)ではO（絶対格）が関係節化されている。(5a)と(5b)は適格である。それに対し、(5c)は、A（能格）が関係節化されていて、不適格である。

- (5) a. miiraq kamat-tu-q
 child.ABS angry-REL.INTR-SG
 ‘the child that is angry’
- b. nanuq Pitta-p tuqu-ta-a
 polar.bear.ABS Piita-ERG kill-TR.PART-3SG
 ‘a polar bear killed by Piita’
- c. *angut aallaat tigu-sima-sa-a
 man.ABS gun.ABS take-PERF-REL.TR-3SG.SG
 ‘the man who took the gun’
- (Manning 1996: 84)

Dixon (1994) や Manning (1996) は、統語現象には、ある言語では統語的対格性を示すが別の言語では統語的能格性を示す統語現象と全ての言語で統語的対格性を示す統語現象があると考えている。Dixon (1994) が言語普遍的に統語的対格性を示すと考えている統語現象は、(i) 命令文、(ii) can, try, begin, want などに相当する述語におけるコントロールのターゲット、(iii) 照応詞の分布、(iv) 使役構文などである。Dixon (1994) も Manning (1996) も照応詞の分布が言語普遍的に統語的対格性を示すと考えている。

統語的能格性を示す統語現象を持っている言語は、基本的に、絶対格・能格型の格配列など形態的能格性を持っているが、Dixon (1994) や Manning (1996) は、形態的能格性を持つ言語には、統語的能格性を示す統語現象を持っている言語と持っていない言語があると考えている。Dixon (1994: 175) は、アバール語を統語的能格性を示す統語現象を持っていない言語に分類

している。一般に、統語的能格性を持つ言語の代表と考えられているのは Dyirbal 語である。Dyirbal 語は次のような統語的能格性を示す統語現象を持っている。(i) 等位接続における後文での名詞句の省略、(ii) 従位接続における従属節での名詞句の省略、(iii) 関係節化などである⁵。どのような言語のどのような統語現象が統語的能格性を示すのかについては、Dixon (1994) にある程度詳しくまとめられている。

3. 意味役割と文法関係

本稿では、アバル語の相互代名詞の分布を分析するのに「意味役割」と「文法関係」という二つの範疇を用いる。そこで、意味役割と文法関係について簡単な説明を行いたい。

意味役割とは、動詞など主要部（あるいは、節）によって表される状況に対してアクタントの指示対象が持っている役割（あるいは、働き）を抽象化し、いくつかに分類した意味統語的な範疇である。どのような意味役割を設定するべきかという問題には、いろいろと異なった提案がある。一般的には、主な意味役割として、動作主 (Agent)、被動者 (Patient)、対象物 (Theme)、受益者 (Beneficiary)、受け手 (Recipient)、経験者 (Experiencer)、道具 (Instrument)、場所 (Location)、着点 (Goal)、起点 (Source) などが設定されている。意味役割は優位性において階層をなしていると考えられている。例えば、Bresnan and Kanerva (1989) は (6) の意味役割の階層を仮定している。

- (6) Agent > Beneficiary > Recipient/Experiencer > Instrument
> Theme/Patient > Location/Goal/Source

意味役割やそれに類する概念について詳しくは、Fillmore (1968)、Jackendoff (1972, 1990)、Andrews (1985) とそこであげられている文献を参照していただきたい。

次に、文法関係に移る。本稿では、LFG(Lexical Functional Grammar) や HPSG(Head-Driven Phrase Structure Grammar) のように、統語部門での派生を認めない立場をとる。したがって、RG(Relational Grammar) のようにアクタントが派生によって二重に文法関係を持つことはない。文法関係

⁵ Dyirbal 語の統語的能格性について詳しくは Dixon(1972) を参照していただきたい。

には主要文法関係と二次的文法関係がある⁶。主要文法関係は主要文法関係1と主要文法関係2からなる⁷。文法関係は、優位性において、下の(7)の階層をなしている。

- (7) a. 主要文法関係 > 二次的文法関係
 b. 主要文法関係1 > 主要文法関係2

主格・対格型の格配列を持つ諸言語では、一般に、SとAが主要文法関係1でOが主要文法関係2であると考えられている。絶対格・能格型の格配列を持つ言語に対してはいくつかの提案がなされている。Marantz (1984)、Manning (1996)などは、バスク語のように統語的能格性を示す統語現象を持っていない言語ではSとAが主要文法関係1で、Oが主要文法関係2であり、Dyirbal語やエスキモー諸語のように統語的能格性を示す統語現象を持っている言語では、SとOが主要文法関係1で、Aが主要文法関係2であると考えている。

本稿では、Dyirbal語やエスキモー諸語に関してはMarantz (1984)、Manning (1996)などの立場を受け入れ、Dyirbal語やエスキモー諸語でSとOが主要文法関係1で、Aが主要文法関係2であり、Dyirbal語やエスキモー諸語が統語的能格性を示す統語現象を持っているのはそのためであると考ええる。アバール語も、本稿で明らかにするように、Dyirbal語やエスキモー諸語と同様に、統語的能格性を示す統語現象を持っている。したがって、アバール語でもSとOが主要文法関係1で、Aが主要文法関係2であると仮定する。一方、バスク語などでSとAが主要文法関係1で、Oが主要文法関係2であるかどうか、また、バスク語などが統語的能格性を示す統語現象を持っていないのは何に起因するのかについては本稿に直接関係がないので扱わない。

⁶ 主要文法関係と二次的文法関係は、それぞれ、RGでの'term'と'non-term'に、LFGでの直(direct)文法関係と斜(oblique)文法関係に対応する。

⁷ 主要文法関係1、主要文法関係2は、それぞれ、「文法主語」、「直接目的語」とよく呼ばれているが、「文法主語」、「直接目的語」という用語は誤解を招きやすいので、RGに従い、数字を用いて表すことにする。

4. 相互代名詞の分布

前節までの議論をふまえ、アバール語の相互代名詞 *tsotsa*-の分布を考察していくことにする。

4.1 主要アクタントと二次的アクタントの照応関係

最初に、主要アクタント (S、A、O) と二次的アクタントを相互代名詞で結び付ける場合に、相互代名詞と先行詞がどちらの位置に現れることができるのかを見ていく。

4.1.1 S と二次的アクタントの場合

アバール語では、S (絶対格) は二次的アクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になることができるが、反対に、二次的アクタントは S (絶対格) の位置にある相互代名詞の先行詞になることができない。例を示すと、(8a)、(9a) は、S (絶対格) が二次的アクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になっていて、適格な文である⁸。それに対し、(8b)、(9b) では、二次的アクタントが S (絶対格) の位置にある相互代名詞の先行詞になっていて、不適格な文である⁹。

- (8) a. *Hel* **tsotsazda** *kx'ochana*.
 彼ら・ABS お互い・LOC(I) キスする・PST
 「彼らがお互いにキスした。」
- b. **Hezda* **tsotsal** *kx'ochana*.
 彼ら・LOC(I) お互い・ABS キスする・PST
 「彼らにお互いがキスした。」
- (9) a. *Hel* **tsotsazukx** *ralahana*.
 彼ら・ABS お互い・LOC(II) 見る・PST
 「彼らがお互いを見た／彼らがお互いに目をやった。」

⁸ 本稿では、先行詞を斜字体で、照応詞 (再帰代名詞、相互代名詞) を太字体で表す。

⁹ 本稿を通して明らかになるように、アバール語の相互代名詞 *tsotsa*-の絶対格形は実際に用いられないことがない。そこで、*tsotsa*-の絶対格形を便宜的に形態論的に予測される '*tsotsal*' で表すことにする。

b. **Hezuxx* *tsotsal* *ralahana*.

彼ら・LOC(II) お互い・ABS 見る・PST

「彼らをお互いが見た／彼らにお互いが目をやった。」

S と二次的アクタントを意味役割の観点から見ると、大多数の自動詞では、S が二次的アクタントより意味役割の階層で高い位置にあると考えられている。しかし、斜格経験者述語 (oblique experiencer predicates) に分類されるような自動詞では、二次的アクタントで現れる経験者が S で現れる被経験者より意味役割の階層で高い位置にあると考えられている。斜格経験者述語は世界の多くの言語にあるが、アバール語の自動詞の中にも斜格経験者述語がいくつかある。-otʃ'ize (気に入る、欲する) などの述語では経験者が与格で現われ、-içize (見る、見える)、raʃize (聞く、聞こえる)、ʒaze (知る)、-ich'ch'ize (分かる)、rixine (嫌う)、ch'alʃine (飽きる)、rak'alde kkeze (思う)、rak'alde shshweze (思い出す) などの述語では経験者が所格 (I) で現われる。被経験者は常に S (絶対格) として現われる。(10) は経験者が与格で現われている例であり、(11) は経験者が所格 (I) で現われている例である。

(10) ʃalie Pat'imat jotʃ'ula.

Ali・DAT Patimat・ABS 気に入っている・PRS

「Ali に Patimat が気に入っている。」

(11) ʃalida Pat'imat jiçana.

Ali・LOC(I) Patimat・ABS 見る／見える・PST

「Ali が Patimat を見た／Ali に Patimat が見えた。」

次の (12) は、イタリア語の与格経験者述語文であるが、与格経験者が S の位置にある再帰代名詞の先行詞になっている。

(12) A *Mario* piace solo *sé stesso*.

to Mario likes only self

'Mario likes only himself.'

(Rosen 1988: 27)

Rosen (1988: 27)、Alsina (1996: 254) によると、イタリア語の与格経験者述語文では、(12) のように、経験者である二次的アクタントは S の位置に

ある再帰代名詞の先行詞になることができるが、反対に、Sは経験者である二次的アクタントの位置にある再帰代名詞の先行詞になることができない。

上述の点において、アバール語の相互代名詞の分布はイタリア語の再帰代名詞の分布とは異なる。アバール語の斜格経験者述語では、他の自動詞と同様に、S（絶対格）は二次的アクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になることができるが、反対に、二次的アクタントはS（絶対格）の位置にある相互代名詞の先行詞になることができない。(13a)は、被経験者であるS（絶対格）が与格経験者である相互代名詞の先行詞になっていて、適格な文である。それに対し、(13b)は、与格経験者が被経験者であるS（絶対格）の位置にある相互代名詞の先行詞になっていて、不適格な文である。また、(14a)は、被経験者であるS（絶対格）が位格(I)経験者である相互代名詞の先行詞になっていて、適格な文である。それに対し、(14b)は、位格(I)経験者が被経験者であるS（絶対格）の位置にある相互代名詞の先行詞になっていて、不適格な文である。

- (13) a. *Hel tsotsaze rotʃ'ula.*
 彼ら・ABS お互い・DAT 気に入っている・PRS
 「彼らがお互いに気に入っている。」
- b. **Hezie tsotsal rotʃ'ula.*
 彼ら・DAT お互い・ABS 気に入っている・PRS
 「彼らにお互いが気に入っている。」
- (14) a. *Hel tsotsazda riçana.*
 彼ら・ABS お互い・LOC(I) 見る／見える・PST
 「彼らをお互いが見た／彼らがお互いに見えた。」
- b. **Hezda tsotsal riçana.*
 彼ら・LOC(I) お互い・ABS 見る／見える・PST
 「彼らがお互いを見た／彼らにお互いが見えた。」

4.1.2 A と二次的アクタントの場合

アバール語では、A（能格）は二次的アクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になることができるが、反対に、二次的アクタントはA（能格）

の位置にある相互代名詞の先行詞になることができない。以下に例を示す。(15a)、(16a)は、A（能格）が二次的アクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になっていて、適格な文である。それに対し、(15b)、(16b)は、二次的アクタントがA（能格）の位置にある相互代名詞の先行詞になっていて、不適格な文である。

- (15) a. *Hez* *sualal* *tsotsaze* *tɬ'una*.
 彼ら・ERG 質問・PL,ABS お互い・DAT 与える・PST
 「彼らがお互いに質問を与えた。」
- b. **Hezie* *tsotsatsa* *sualal* *tɬ'una*.
 彼ら・DAT お互い・ERG 質問・PL,ABS 与える・PST
 「彼らにお互いが質問を与えた。」
- (16) a. *Hez* *heb* *tsotsazukxa* *bakxana*.
 彼ら・ERG それ・ABS お互い・ABL(II) 奪い取る・PST
 「彼らがそれをお互いから奪い取った。」
- b. **Hezuxxa* *heb* *tsotsatsa* *bakxana*.
 彼ら・ABL(II) それ・ABS お互い・ERG 奪い取る・PST
 「彼らからそれをお互いが奪い取った。」

4.1.3 Oと二次的アクタントの場合

アバール語では、O（絶対格）は二次的アクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になることができるが、二次的アクタントはO（絶対格）の位置にある相互代名詞の先行詞になることができない。(17)-(19)の各aは、O（絶対格）が二次的アクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になっていて、適格な文である。反対に、(17)-(19)の各bは、二次的アクタントがO（絶対格）の位置にある相互代名詞の先行詞になっていて、不適格な文である。

- (17) a. *Hes* *hel* *tsotsazda* *ruçana*.
 彼・ERG それら・ABS お互い・LOC(I) 結ぶ・PST
 「彼がそれらを互いに結んだ。」

- b. *Hes *hezda* **tsotsal** *ruçana*.
 彼・ERG それら・LOC(I) お互い・ABS 結ぶ・PST
 「彼がそれらに互いを結んだ。」

- (18) a. *ʕalitsa* *hel* **tsotsazde** *husana*.
 Ali・ERG 彼ら・ABS お互い・ALL(I) けしかける・PST
 「Aliが彼らをお互いに対してけしかけた。」

- b. **ʕalitsa* *hezde* **tsotsal** *husana*.
 Ali・ERG 彼ら・ALL(I) お互い・ABS けしかける・PST
 「Aliが彼らに対してお互いをけしかけた。」

- (19) a. Hes *hel* **tsotsazdasa** *rat'a* *haruna*.
 彼・ERG それら・ABS お互い・ABL(I) 離れた (Adj) する・PST
 「彼がそれらを互いから離れた。」

- b. *Hes *hezdas* **tsotsal** *rat'a* *haruna*.
 彼・ERG それら・ABL(I) お互い・ABS 離れた (Adj) する・PST
 「彼がそれらから互いを離れた。」

ここで、二次的アクタントがOより意味役割の階層で高い位置にある場合について考えてみる。多くの言語は、Oの意味役割が「対象物」、二次的アクタントの意味役割が「受け手」という型の動詞やOの意味役割が「被経験者」、二次的アクタントの意味役割が「経験者」という型の動詞を持っている。例を挙げると、日本語の「与える」、「売る」、「紹介する」、「見せる」や英語の‘give’、‘sell’、‘introduce’、‘show’などである。「受け手」、「経験者」は「対象物」、「被経験者」より意味役割の階層で高い位置にあると考えられている。アパール語では、Oの意味役割が「対象物」、二次的アクタントの意味役割が「受け手」という型の動詞には、*tʰeze*（渡す、与える）、*-ichize*（売る）などがあるが、Oの意味役割が「被経験者」、二次的アクタントの意味役割が「経験者」という型の動詞はないように思われる。下の(20)では、述語に*-ichize*（売る）が用いられていて、「対象物」であるOと「受け手」である二次的アクタントが相互代名詞で結び付けられている。(20)は、意味の観点からかなり不自然な文である。しかし、(20)のような

文以外、二次的アクタントが O より意味役割の階層で高い位置にある文を作ることができない。

(20) a. *?/??Hes layzal tsotsaze richana.*
 彼・ERG 奴隷・PL,ABS お互い・DAT 売る・PST
 「彼が奴隷をお互いに売った。」

b. **Hes layzaderie tsotsal richana.*
 彼・ERG 奴隷・PL,DAT お互い・ABS 売る・PST
 「彼が奴隷にお互いを売った。」

(20a) は、意味の不自然さのためぎこちないが、容認される文である。一方、(20b) は容認されない文である。

4.1.4 まとめ

4.1.1 - 4.1.3 をまとめると次のようになる。アバール語では、S (絶対格)、A (能格)、O (絶対格) と二次的アクタントを相互代名詞で結び付ける場合、S (絶対格)、A (能格)、O (絶対格) が二次的アクタントより意味役割の階層で高い位置にあるか、低い位置にあるかに関係なく、S (絶対格)、A (能格)、O (絶対格) は二次的アクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になることができるが、反対に、二次的アクタントは S (絶対格)、A (能格)、O (絶対格) の位置にある相互代名詞の先行詞になることができない。この一般化は、アバール語の相互代名詞が文法関係の階層 (7a)=(21) に基づく制約 (22) を持っているという形で理論的に説明することができると思われる。

(21) 主要文法関係 > 二次的文法関係

(22) 先行詞が相互代名詞より文法関係の階層で高い位置になくはない。

4.2 A と O の照応関係

4.1 では、アバール語で、S、A、O は二次的アクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になることができるが、反対に、二次的アクタントは S、A、O の位置にある相互代名詞の先行詞になることができないことを示した。こ

ここでは、A が O の位置にある相互代名詞の先行詞になることができるのか、また、逆に、O が A の位置にある相互代名詞の先行詞になることができるのかを問題にする。A が O の位置にある相互代名詞の先行詞になることができ、O が A の位置にある相互代名詞の先行詞になることができないなら、アバール語の相互代名詞の分布は統語的対格性を示すことになり、反対に、O が A の位置にある相互代名詞の先行詞になることができ、A が O の位置にある相互代名詞の先行詞になることができないなら、アバール語の相互代名詞の分布は統語的能格性を示すことになる。

Dixon (1994)、Manning (1996) は、世界の全ての言語で照応詞の分布は統語的対格性を示すと予測している。英語とロシア語の相互代名詞を例にする。英語の相互代名詞 *each other* の分布もロシア語の相互代名詞 *drug drug* の分布も統語的対格性を示す。英語でもロシア語でも、S、A、O は二次的アクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になることができるが、反対に、二次的アクタントは S、A、O の位置にある相互代名詞の先行詞になることができない。そして、英語の例 (23) とロシア語の例 (24) が示すように、英語でもロシア語でも A は O の位置にある相互代名詞の先行詞になることができるのに対し、O は A の位置にある相互代名詞の先行詞になることができない。

- (23) a. *John and Mary know each other.*
 b. ***Each other** know *John and Mary.*

- (24) a. *Tanja i Olja ponimajut drug druga.*
 Tanja・NOM と Olja・NOM 理解する・PRS お互い・ACC
 「Tanja と Olja がお互いを理解している。」

- b. **Tanju i Olju ponimaet drug drug.*
 Tanja・ACC と Olja・ACC 理解する・PRS お互い・NOM
 「Tanja と Olja をお互いが理解している。」

Manning (1996) は形態的能格性を持つ言語であるバスク語の例 (Ortiz de Urbina 1989: 111 から引用) を出している。バスク語の相互代名詞の分布も統語的対格性を示す。バスク語でも、S、A、O は二次的アクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になることができるが、反対に、二次的ア

クタントは S、A、O の位置にある相互代名詞の先行詞になることができない。そして、(25a) が示すように、A は O の位置にある相互代名詞の先行詞になることができるが、逆に、(25b) が示すように、O は A の位置にある相互代名詞の先行詞になることができない。

(25) a. *Gudari-ek* **elkar** hiltren zuten
 soldiers-ERG RECIP.ABS kill AUX
 ‘The soldiers killed each other.’

b. **Gudari-ak* **elkarr-ek** hiltren zituen/zituzten
 soldiers-ABS RECIP-ERG kill AUX
 ‘The soldiers killed each other.’

(Manning 1996: 5)

照応詞の分布が言語普遍的に統語的対格性を示すという Manning (1996) の類型論的一般化は、英語の (23) やバスク語の (25) の Manning (1996) の理論的分析と結びついている。Manning (1996) は、言語普遍的に統語的対格性を示す統語現象は意味役割と関係していると考え、(23a)、(25a) が適格な文であり、(23b)、(25b) が不適格な文であることを、「先行詞が相互代名詞より意味役割の階層で高い位置になくてはならない」という制約を用いて、説明することを試みている。Dalrymple (1993) も同様の説明を提案している。これらの研究と異なり、Pollard and Sag (1992) や Dalrymple et al. (1995) は、「先行詞が相互代名詞より文法関係の階層で高い位置になくてはならない」という制約で説明することを試みている。

ここで、アバール語の分析に移ることにすると、アバール語の相互代名詞の分布は統語的能格性を示す。アバール語では、O (絶対格) は A (能格) の位置にある相互代名詞の先行詞になることができるが、反対に、A (能格) は O (絶対格) の位置にある相互代名詞の先行詞になることができない。以下に例を示す。(26a)、(27a) は、O (絶対格) が A (能格) の位置にある相互代名詞の先行詞になっていて、適格な文である。それに対し、(26b)、(27b) は、A (能格) が O (絶対格) の位置にある相互代名詞の先行詞になっていて、不適格な文である。

- (26) a. *Hel* **tsotsatsa** ʔukx'ana.
 彼ら・ABS お互い・ERG 傷つける・PST
 「彼らをお互いが傷つけた。」
- b. **Hez* **tsotsal** ʔukx'ana.
 彼ら・ERG お互い・ABS 傷つける・PST
 「彼らがお互いを傷つけた。」
- (27) a. *Hel* **tsotsatsa** kakana.
 彼ら・ABS お互い・ERG けなす・PST
 「彼らをお互いがけなした。」
- b. **Hez* **tsotsal** kakana.
 彼ら・ERG お互い・ABS けなす・PST
 「彼らがお互いをけなした。」

この事実は、全ての言語で照応詞の分布が統語的対格性を示すという Dixon (1994) や Manning (1996) の予測が正しくないことを示している。

(26a) と (27a) が適格な文であり、(26b) と (27b) が不適格な文であることは次のような形で説明することができると思われる。アバール語では、S (絶対格) と O (絶対格) が主要文法関係 1 を担っていて、A (能格) が主要文法関係 2 を担っている。アバール語は、文法関係の階層 (7b)=(28) に基づく制約 (29) を持っている。

(28) 主要文法関係 1 > 主要文法関係 2

(29) 先行詞が相互代名詞より文法関係の階層で高い位置になくはならない。

(26a) と (27a) は、制約 (29) を守っているため、適格であり、一方、(26b) と (27b) は、制約 (29) に違反しているため、不適格である。

4.3 二次的アクタント間の照応関係

最後に残ったのは、相互代名詞とその先行詞が共に二次的アクタントの位置にある場合である。次の (30a) では、与格のアクタントが後置詞 *hakx'aʔuʔ* (~ について) を伴うアクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になってい

る。逆に、(30b)では、後置詞 *ħakx'aʔuʔ*(~について) を伴うアクタントが与格の相互代名詞の先行詞になっている。(31a)では、位格 (I) のアクタントが後置詞 *ħakx'aʔuʔ*(~について) を伴うアクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になっている。逆に、(31b)では、後置詞 *ħakx'aʔuʔ*(~について) を伴うアクタントが位格 (I) の相互代名詞の先行詞になっている。

- (30) a. *Ditsa hezije tsotsazul ħakx'aʔuʔ*
 私・ERG 彼ら・DAT お互い・GEN について
sualal tʃ'una.
 質問・PL,ABS 与える・PST
 「私が彼らにお互いについて質問をした。」

- b. (?)*Ditsa hezul ħakx'aʔuʔ tsotsaze*
 私・ERG 彼ら・GEN について お互い・DAT
sualal tʃ'una.
 質問・PL,ABS 与える・PST
 「私が彼らについてお互いに質問をした。」

- (31) a. *ʕalitsa hezda tsotsazul ħakx'aʔuʔ hikx'ana.*
 Ali・ERG 彼ら・LOC(I) お互い・GEN について 尋ねる・PST
 「Ali が彼らにお互いについて尋ねた。」

- b. (?)*ʕalitsa hezul ħakx'aʔuʔ tsotsazda hikx'ana.*
 Ali・ERG 彼ら・GEN について お互い・LOC(I) 尋ねる・PST
 「Ali が彼らについてお互いに尋ねた。」

(30a)、(30b)、(31a)、(31b)は、全て適格な文である。しかし、(30a)、(31a)と(30b)、(31b)を比べると、明らかに前者が後者より好まれる。

ここで、アバル語の(30)、(31)に対応するような英語の文(32)とロシア語の文(33)、(34)について考えてみる。

- (32) a. I spoke to *the men* about **each other**.
 b. *I spoke about *the men* to **each other**. (Chomsky 1981: 225)

- (33) a. Natasha rasskazala *im* **drug o druge.**
 Natasha・NOM 語る・PST 彼ら・DAT について+お互い・LOC
 「Natasha が彼らにお互いについて語った。」
- b. *Natasha rasskazala o *nix* **drug drugu.**
 Natasha・NOM 語る・PST について 彼ら・LOC お互い・DAT
 「Natasha が彼らについてお互いに語った。」
- (34) a. Tanja sprosila u *nix*
 Tanja・NOM 尋ねる・PST から 彼ら・GEN
drug o druge.
 について+お互い・LOC
 「Tanja は彼らにお互いについて尋ねた。」
- b. *Tanja sprosila o *nix*
 Tanja・NOM 尋ねる・PST について 彼ら・LOC
drug u druga.
 から+お互い・GEN
 「Tanja は彼らについてお互いに尋ねた。」

(32a)、(33a)、(34a)は適格な文であるが、(32b)、(33b)、(34b)は不適格な文である。この適格性の差は、一般に、意味役割の階層に基づく制約(35)を用いて説明される(Jackendoff 1972, Dalrymple 1993)。

- (35) 先行詞は相互代名詞より意味役割の階層で高い位置になくはない。

仮に「～について」が表す意味役割を「情報内容」と呼ぶことにすると¹⁰、意味役割「受け手」、「渡し手」と意味役割「情報内容」の相対的優位性は、一般に、次のように考えられている。

¹⁰ 「～について」が表す意味役割を Jackendoff(1972)などは、対象物の一種とみなしている。

(i) のような文について考えてみる。

(i) 太郎が次郎について三郎に重要なことを話した。

(i) で対象物は明らかに「重要なことを」である。したがって、「次郎について」を対象物とするのは問題がある。(31)-(34)では、意味役割「対象物」のアクタントが明示的には現れていないと考えられる。

(36) 受け手、渡し手>情報内容

ここで、アバール語に戻ると、アバール語の (30a)、(31a) は、上の制約 (35) を守っていて、適格な文である。一方、(30b)、(31b) は制約 (35) に違反している。しかし、(30b)、(31b) は、人によって容認度が少し低くなるぐらいで、適格な文である。これは、アバール語にも制約 (35) があるが、英語やロシア語においてよりも弱い制約であると考えることができる。

しかし、アバール語にも、制約 (35) に違反して、不適格になる文もある。次の (37)、(38) を見てみよう。(37)、(38) でも、相互代名詞と先行詞が共に二次的アクタントである。

(37) a. *ʕalida-gi* *ʕisada-gi* **tsotsazul** **ħakx'aʔuʔ**
Ali・LOC(I)-も Isa・LOC(I)-も お互い・GEN について
ħik' ʔala.

よく知っている・PRS

「Ali と Isa がお互いについてよく知っている。」

b. **ʕalil-gi* *ʕisal-gi* **ħakx'aʔuʔ tsotsazda**
Ali・GEN-も Isa・GEN-も について お互い・LOC(I)
ħik' ʔala.

よく知っている・PRS

「Ali と Isa についてお互いがよく知っている。」

(38) a. *Hezda* **tsotsazul** **ħakx'aʔuʔ**
彼ら・LOC(I) お互い・GEN について
shibnigi rak'alde shshwech'o.
何も・ABS 思い出す・PST,NEG

「彼らがお互いについて何も思い出さなかった。」

b. **Hezul* **ħakx'aʔuʔ tsotsazda**
彼ら・GEN について お互い・LOC(I)
shibnigi rak'alde shshwech'o.

何も・ABS 思い出す・PST,NEG

「彼らについてお互いが何も思い出さなかった。」

(37a)、(38a)では、先行詞の意味役割が「経験者」であり、相互代名詞の意味役割が「情報内容」である。他方、(37b)、(38b)では、先行詞の意味役割が「情報内容」であり、相互代名詞の意味役割が「経験者」である。意味役割「経験者」と意味役割「情報内容」の相対的優位性は、一般に、次のように考えられている。

(39) 経験者 > 情報内容

これに基づく、適格な文である (37a)、(38a) は制約 (35) を守っているが、不適格な文である (37b)、(38b) は制約 (35) に違反していると説明される。

(30b)、(31b) が適格な文であり、(37b)、(38b) が不適格な文であることを説明するためには、例えば、次のような方法が考えられる。同一節内のアクタントを、意味役割の階層で高い順に、 A_1 、 A_2 、 A_3 ... A_n と分類する。 A_1 、 A_2 、 A_3 ... A_n の間に次の (40) の優位性の階層を仮定する。この階層 (40) を A-階層と呼ぶことにする。

$$(40) A_1 > A_2 > A_3 > \dots > A_n$$

ここで、 A_k と A_{k+1} の相対的な優位性の差は A_{k+1} と A_{k+2} の相対的な優位性の差より大きいと仮定してみる。すなわち、 A_k と A_{k+1} の相対的な優位性の差を d_k とすると、 $d_k > d_{k+1}$ となる。さらに、次の制約 (41) を仮定する。

(41) 先行詞が相互代名詞より A-階層で l ポイント以上低い位置にあつてはならない。

制約 (41) のポイントの l の値について考える。(30)、(31) では、意味役割「動作主」のアクタントが A_1 で、「受け手」、「渡し手」のアクタントが A_2 で、「対象物」のアクタントが A_3 で、「情報内容」のアクタントが A_4 である。それに対し、(37)、(38) では、「経験者」のアクタントが A_1 で、「被経験者」のアクタントが A_2 で、「情報内容」のアクタントが A_3 である。(30b)、(31b) では、先行詞が相互代名詞より A-階層で $d_2 + d_3$ ポイント低い位置にある。(37b)、(38b) では、先行詞が相互代名詞より A-階層で $d_1 + d_2$ ポイント低い位置にある。 $d_k > d_{k+1}$ であるから、 $d_1 + d_2 > d_2 + d_3$ である。(30b)、(31b) は適格文であり、(37b)、(38b) は不適格な文であるから、制約

(41)がこれらの文の適格性の違いを説明するためには、 $d_1 + d_2 > l > d_2 + d_3$ でなくてはならないことになる。

5. まとめ

本稿では、アバール語の相互代名詞 *tsotsa* の分布を考察した。4.1 では、アバール語で主要アクタント (S、A、O) は二次的アクタントの位置にある相互代名詞の先行詞になることができるが、反対に、二次的アクタントは主要アクタント (S、A、O) の位置にある相互代名詞の先行詞になることができないことを示した。4.2 では、アバール語で O が A の位置にある相互代名詞の先行詞になることができるが、反対に、A は O の位置にある相互代名詞の先行詞になることができないことを示した。このことによって、アバール語の相互代名詞 *tsotsa* の分布が Dixon(1994) や Manning(1996) の予測に反して、類型論的にめずらしい統語的能格性を示すことを明らかにした。4.1 と 4.2 で示したアバール語の事実を、アバール語では、S と O が主要文法関係 1、A が主要文法関係 2、S、A、O 以外のアクタントが二次的 文法関係を担っているという仮定と、主要文法関係 1 > 主要分布関係 2 > 二次的 文法関係という文法関係の階層があるという仮定のもとで、「先行詞が相互代名詞より文法関係の階層で高い位置になくてはならない」という制約 (制約 1 と呼ぶ) を用いて説明することを提案した。

4.3 では、先行詞と相互代名詞の両方が二次的アクタントの位置にある事例を検討した。英語やロシア語などが持っていると考えられる「先行詞が相互代名詞より意味役割の階層で高い位置になくてはならない」という制約はアバール語には強すぎることを示し、「先行詞が相互代名詞より A-階層で l ポイント以上低い位置にあってはならない」という制約 (制約 2 と呼ぶ) を用いてアバール語の文の適格性を説明することを一つの可能性として提案した。A-階層とは、同一節内のアクタントを、意味役割の階層に従って、 A_1 、 A_2 、 $A_3 \dots A_n$ と分類し、 A_1 、 A_2 、 $A_3 \dots A_n$ の間に仮定した優位性の階層である。

アバール語では制約 2 「先行詞が相互代名詞より A-階層で l ポイント以上低い位置にあってはならない」は先行詞と相互代名詞の両方が二次的アクタントの位置にある場合にだけ有効である。したがって、アバール語では制

約1「先行詞が相互代名詞より文法関係の階層で高い位置になくはならない」が制約2より優勢な制約であると考えべきであり、ある文が制約1に違反している場合にだけ、制約2が発動されることになる。

参考文献

- Andrews, Avery. D. (1985) "The Major Functions of the Noun Phrase," in Timothy. Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description, Vol. 1: Clause Structure*. 62-154. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ataev, B. M. (1997) *Istorija Izuchenija Avarskogo Jazyka*. Maxachkala: Dagestan - XXI vek.
- Bokarev, A. A. (1949) *Sintaksis Avarskogo Jazyka*. Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
- Bresnan, Joan and Jonni M. Kanerva (1989) "Locative Inversion in Chicheŵa: A Case Study of Factorization in Grammar," *Linguistic Inquiry*, 20: 1-50.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications.
- Comrie, Bernard (1978) "Ergativity," in Lehmann, Winfred P. (ed.) *Syntactic Typology*. 329-394. Austin: Universtiy of Texas Press.
- Dalrymple, Mary (1993) *The Syntax of Anaphoric Binding*. Stanford, California: CSLI.
- Dalrymple, Mary, John T. Maxwell III, and Annie Zaenen (1995) "Modeling Syntactic Constraints on Anaphoric Binding," in Dalrymple, Mary, Ronald M. Kaplan, John T. Maxwell III, and Annie Zaenen (eds.) *Formal Issues in Lexical Functional Grammar*. 167-175. Stanford, California: CSLI Publications.
- Dixon, R. M. W. (1972) *The Dyirbal Language of North Queensland*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Dixon, R. M. W. (1979) "Ergativity," *Language*, 55: 59-138.
- Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles (1968) "The Case for Case," in Emmon Bach and Robert Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. 1-90. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Madieva, G. I. (1980) *Morfologija Avarskogo Literaturnogo Jazyka*. Maxachkala: Daguchpedgiz.
- Manning, Christopher D. (1996) *Ergativity: Argument Structure and Grammatical Relations*. Stanford, California: CSLI Publications.
- Marantz, Alec P. (1984) *On the Nature of Grammatical Relations*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Ortiz de Urbina, Jon (1989) *Parameters in the Grammar of Basque*. Dordrecht: Foris Publications.
- Pollard, Carl and Ivan A. Sag (1992) "Anaphors in English and the Scope of Binding Theory," *Linguistic Inquiry*, 23: 261-303.